

災害の記憶を忘れずに、支援を続けていきたい

宮永優美さん（平山）

金井 正さん（ゆずの木台）

現実を知ってもらいたい

陸前高田市の様子（6月17日撮影）



被災者の温かい心に触れて

そして5月、2度目の陸前高田市。今度は、2事業所の有志8人で訪れた。この時のボランティアは、山間部にある畑の瓦礫撤去だった。「りんご畑での作業でしたが、作業を

宮永さんと金井さんは、越生毛呂ロータリークラブ主催の復興支援で4月に初めて被災地陸前高田市に入った。「初めて訪れたときには、あまりにショックな光景が眼前に広がり、言葉が出ませんでした」と金井さんは当時のことを語る。「被災地を実際に見て、私たちにできることはないかと真剣に考えました。考えた結果、この現実をもっと多くの人に知ってもらう必要があると感じたのです」と宮永さんは話す。そしてそれぞれが属する事業所同士で話し合い、毎月1回事業所の有志で復興支援のためのボランティアをすることを決めた。



復興支援活動の様子

では、生の卵があまり流通していないので、卵は、本当に現地の人に喜ばれました」と宮永さんが笑顔で話してくれた。「小さな志

行った畑は、海から相当な距離があるのですが、瓦礫でいっぱいでした。この時は津波の力の恐ろしさを実感しました」と金井さんは語る。「作業中、畑の持ち主の方が何度も冷たい飲み物を差し入れてくれました。自分が被災した当事者であるにもかかわらず。この時は自然と涙がこぼれそうになりました」と宮永さん。現地の人々の温かい心に触れ、改めて復興支援を続けていくことを強く心に決めたそう。

心の絆と支援の輪

6月、3度目のボランティアに行く直前、町内の事業者の仲間から被災地に行くのなら自分の事業所で扱っている卵を持って行ってもらいたいとの申し出があった。「被災地



両事業所の皆さん
（最前列左から金井さんと宮永さん）

継続の必要性

「怖いのは災害の記憶が忘れられていってしまうこと。本当に大切なのは、これからなんです。まだまだ被災地は、ボランティアの力を必要としています。その必要性がある以上は、これからも毎月一回の支援を続けていきたいと思っています」と宮永さんは、力強く語ってくれた。